

中国文学にみる「近代家族」批判

——口中文性文学を通して——

白水紀子

一、はじめに

家族を描いた文学作品をみると、そのテーマは、家族の中の男と女、妻と夫の関係と役割、親と子の確執や愛憎、血縁への問いかけ、など多種多様である。日本の場合、家族小説あるいは家庭小説という呼び方は、狭義には、一九世紀末に盛んだった明治家庭小説のように、女性主人公が良妻賢母教育で培われた英知を使って夫に協力しながら一家をなしていく「通俗小説」や、家族を守るために強い父がさまざまな「敵」や困難と戦い、父親を中心に家族が團結する様を描いた、いわゆる「無理な状況にある種の道徳でまとめていく」という道徳小説⁽¹⁾を指したが、今日では一般に、家族のありかたを問う作品であれば、時にこれらすべてを家族小説あるいは家庭小説と呼ぶことが多い。そして世界的規模で家族の変容が進む今日、特に家族愛そのものをテーマにする作品が多く書かれるようになっており、中国でもそれは例外ではない。

中国の小説で家族が描かれている作品は、文学が人をその対象としている以上、当然のことながら非常に多い。だがたとえば近代小説の、巴金「家」、老舍「四世同堂」、張愛玲「金鎖記」、曹禺「北京人」、茅盾「子夜」などの名作は、伝統的家制度の枠組みの中で家の対立や崩壊、その複雑な家族関係を批判的に描いたものがほとんどで、重点は古い家制度批判、あるいは個々の家族成員の生き方を通して当時の社会・政治・歴史を描くことにおかれてきた。その意味で最近話題になった余華「活着」(一九九三年)⁽²⁾は、家族が体験した「歴史や政治」は背景に退き、夫婦の間だけでなく親と子の間の交流まで細やかに描かれており、このような家族愛にテーマを絞った作品は中国ではたいへん珍しいのだということに気づかされる。この小説の背景は一九四〇年代から七〇年代の中国農村であるが、家族の生と死を通して描き出される家族の関係やあり方に対する認識は、恐らく作者の中にある今日のものであろう。そしてこの小説が二〇万部を超えるベストセラーになり映画化もされた(一九九四年、張芸謀監督)ということは、中国において家族そのものへの関心が高まりつつあることを示しているよう。

本論にはいる前に、「家族」という漢字の中国語と日本語の概念の違い、及び「近代家族」というタームの用法を確認したい。日本では、一九世紀末の明治期にfamilyの訳語として「家族」「家」があてられたが、戦後になると「家」という言葉が伝統的家制度をイメージしたために、現在では一般に「家族」が多く使用されている。また、日本語の「家庭」は英語のhomeの訳語であり、「家庭」と「家族」は厳密には異なる概念をもつが、しばしば混同して用いられている。一方、中国語の「家族」は氏族・宗族を指し、費孝通の説明によれば、familyの中国語訳は「家庭」であり、父母と子で構成されるグループを指している⁽³⁾。そもそも英語のfamilyにしても、これが夫婦と子供の三者関係から構成される核家族(二世代家族)を基本型とするものと定義され普及するのは一九世紀になってから

のことであるという⁽⁴⁾。また、近代家族という用語も、大きく分けて三つの用法がある。一つは、到達すべき目標・理想としての家族像を指している、友愛によって結ばれる男女平等の民主的な家族を理想視して言うもの。二つは、社会史的研究が明らかにしてきた、歴史的類型としての近代以降に出現した家族を言い、理念型としての家族を指して言うもの。三つは、近代以降の実態としての家族を言い、人により近代のとらえかたが異なるため多様であるが、近代の家族が近代家族、現代の家族が現代家族ということになる。ただ、第三の用法で近代と現代を区別せずに近代以降をすべて近代と呼ぶ場合には、第二の用法と非常に近いものとなる⁽⁵⁾。本稿での記述は主として第二の用法に基づいている。

二、日本と中国における近代家族の歴史

家族とは、「社会的に承認された夫婦の関係を基礎として、そこから派生した親子や兄弟・姉妹等の親族関係を中心に形成された小集団」のことである。しかしながら、このような小集団の多くが「夫婦とその未婚の子どもたち」のみからなり、しかも「子どもたちの基礎的な社会化が夫婦（親）の重要な仕事となる」近代家族（modern family）の誕生は、近代国家形成と不可分の関係にあり、ヨーロッパ社会においては「近代化（＝産業化）」が「家族」と「市場」とを分離し始めた今から二百年くらい前に現れてきたとされる⁽⁶⁾。そして家族が今日のような次元で問題視されるようになったのは、一九七〇年代以降のことで、その契機は、フランスの社会史家アリエス（Aris, Philippe）がその著『子供の誕生』（一九六〇年⁽⁷⁾）でアリエス・ショックとまでいわれる発想の転換をせまる新説を

発表してからだとされている。アリエスは、子供という観念、子供を特別の存在として捉え処遇する「まなざし」や慣行、子供中心の家族や情愛的な家族関係、家族のプライバシーといった、近代家族のイメージはすべて近代の文化の所産であり、近代とともに出現し展開してきたということをさまざまな資料に基づいて明らかにしたのである。そしてこの子供の発見と時を同じくして学校教育が普及し、さらに学校教育の延長として家庭教育が重視されるようになる、母である女性がその担い手となり、ために良妻賢母型の女子教育の普及が促進されたのだった。つまり近代における「子供の発見」は、近代的な「母親概念」の成立や「主婦の誕生」と表裏一体をなしていたのである。それまで子供は労働力として期待される「小さくて不完全な大人」にすぎず、非常に早くから徒弟奉公に出たり農作業の手伝いをし、家事労働も子供たちの仕事であった。ところが近代にはいると子供は学校へ、また大人も、それまで男女を問わず農業や家内工業など生産労働に従事していたものが、生産労働は夫が、家事労働は妻が担うようになり、男は公共領域、女は私的領域という性別役割分業が成立したのである。こうして近年では、今日一般に想起される「父母と未婚の子どもを成員とし、感情的に融合した、福祉追求集団」であるような家族像は、じつは「普遍的」な存在ではなく、「近代家族」という歴史的「類型」であると考えられるようになり、さらに、性別役割分業や「母性愛」が家族の永遠の姿ではなく近代家族イデオロギーの所産であるのなら、近代の終りに到達した現在、当然、この近代家族から脱出することが可能である、という認識に立つことができるようになった。

落合恵美子氏は近代家族の特徴をつぎの八点にまとめている⁽⁸⁾。

- 一、家内領域と公共領域の分離
- 二、家族成員相互の強い情緒的關係
- 三、子ども中心主義
- 四、男は公共領域・女は家内領域という性別分業
- 五、家族の集団性の強化
- 六、社交の衰退
- 七、非親族の排除
- 八、核家族

落合氏は、この概念は「欧米それも西欧の中産階級を主たるモデルとしたもので、日本や第三世界などの他の地域や、労働者をはじめとする他の階層には、いささかの変更なしには適用することはできない。また、階層、地域による出現年代のずれも大きい」としながらも、近代家族の問題を文化的固有性や単なる遅滞に還元して議論を中止すべきではないと述べている。たしかに、近代家族の「内容」を論じることはその国の近代を問うことでもあり、当然、アジアの国々の近代家族は西欧型とは異なる要素を多数含んでいる。たとえば中国では核家族以外に子が親と同居する三世代家族が一定の割合で存在すること、また親族ネットワークが強力であることなど、西欧の家族を基準にした近代家族の条件に合致しない要素もっている。しかしながら、それでは中国に近代家族は存在しないのかと問われれば、やはり歴史の類型としての近代家族は存在すると答えるのが妥当である。落合氏が言わんとすることは、かりに中国の近代家族を論じるのであれば、西欧型近代家族と対立する或いは異なる要素を抽出してその固有の特色を明らかにしていくだけでなく、同時に欧米やその他の国家・地域の近代家族と問題を共有する部分の検討もおろそかにしてはならないということであろう。

以上のような家族研究の流れをふまえ、日本および中国の近代家族の歴史を概観してみよう。まず、日本の近代家族の歴史は二〇世紀の初め（明治三〇年代）に日本型良妻賢母の思想の確立と同時に始まったとされており、現在までに百年ほどの歴史を有していることになる。この間、一九二〇年代の大正期に数としては少数だが（都市就業人口の二割をしめる）新中間層において、西欧型に近い近代家族が誕生し、当時の女性たちにとって良妻賢母教育を受け、近代家族の主婦の座を射止めることが憧れの的となった。その後、「家」と「家庭」の混在した初期の日本型近代家族から家庭を中心とした近代家族へと変遷をたどり、一九六〇年代の高度経済成長期により近代家族の大衆化が

実現する。この頃の社会状況を簡単に紹介すると、六〇年代後半ころには「教育ママ」という言葉が登場、「教育する母親」像も大衆化した。「マイホーム主義」という言葉は六五年には流行語となり、アメリカ型近代家族を理想のモデルとして憧れる現象が生じた（一方のアメリカでは、このころ脱近代家族の動きがみられるようになる）。そして七五年には専業主婦率が最高を記録し、近代家族という理念にもっとも一致した年となった。七〇年代はまた、見合い結婚の数と恋愛結婚の数が逆転する時代でもあり、恋愛＝ロマンチック・ラブが夫婦間の不可欠の感情として称揚されることになる。学会の研究動向も、六〇年代は西欧の科学的育児法による啓蒙、七〇年代は母性強調の心理学・教育学・社会学が盛んであった。⁽⁹⁾ところが八〇年代以降、西欧とりわけ英米のめざましい社会史的研究の成果をうけて日本の家族研究も大きな変化を見せる。これまで日本では、戦前の「家」を家父長制であると否定し、欧米の近代家族を理想化する傾向が強かったが、一連の研究を通して、欧米の近代家族にも日本と同じ支配の問題が存在することに気付かされ、それと同時に多くの共通する問題を抱えていることにも強い関心が向けられるようになったのである。

一方、中国では、前述のように、親族ネットワークが依然として強力であるために、家族の集団性や社交の衰退という項目で欧米を基準にした近代家族の条件に合致しないところが今日でも存在する。まして近代国家建設が始まる民国初期には人口の八〇九割を農村人口が占め、男も女も外に出て野良仕事に従事し、さらに養蚕・製糸や家畜の飼育など家内副業もしていた。そのため、男女間に労働内容の区別はあっても、家内領域と公共領域の分離、及びその性別分業が成立する条件下にはなく、また費孝通が一九三六年華中地区の農村を調査して次のように述べているように⁽¹⁰⁾、農村では、落合氏の挙げる第二項目の家族成員相互の強い情緒的関係、という要素も満たされていなかったと考

えられる。

私は西洋の家庭と我々農村の家庭は、感情生活に関しては同列に論じることができないと実感した。農村では、談笑したり、何か気持ちを伝えたい事があれば同性や同年齢の集団の中でおこなわれ、男は男同士、女は女同士、そしてまた子供たちは子供同士で、労働と子作り以外は、性別や年齢グループ間で非常に大きな距離を保っている。これは決して偶然ではなく、私がみる所、これは子作り以外の多くの機能をコミュニティに持ち込んだ後に生じた結果だと考えられるのである。

この報告は、当時の中国の農村では宗族や地域共同体の活動が家族よりも優位にあり、その中で同性集団や同年齢集団の親密性が保たれていたことを伝えるもので、近代西欧における家族の情緒的関係が子供中心、夫婦間のロマンスティック・ラブ、家族間の親密性に代表されるのは大きく異なっていることがわかる。また民国時期は新聞・雑誌などを通して欧米の新しい家族像が伝統家族にとって代わる到達すべき理想像として紹介され、中上流層の人々を対象に広くそのイメージは浸透していったものの、一方で近代家族成立の前提条件であるはずの一夫一婦制を根幹から揺るがす蓄妾制が存在し続け、さらに中上流層の家庭では複数の家事使用人・乳母など非血縁者が同居していたなど、実態として民国時期に西欧型近代家族の条件を満たすことのできた家族は都市部においても少なかったと考えられる。さらに、一九四九年の建国以降は、近代家族は大衆化をみないまま、女性が公的領域に参入する男女労働型の「超近代家族」でスタートした。この間、宗族の活動は縮小化したが、人民公社化の過程で生産隊や生産大隊等に再編成されるかたちで温存され、家族の集団性やプライバシーよりも国家・党・職場そして一族の利益が優先された。だが、最近のジェンダー研究により、⁽¹⁾建国後五〇年を経た今日でも中国の家族に家父長制構造が抜きがたく存在することが

明らかにされると同時に、改革開放後の中国の家族をとりまく状況が、八〇年代以降大きな変化をみせている欧米各国と多くの点で共通することが認識されるようになってきた。実態としての近代家族は中国では大衆化しなかったといえ、理念としての近代家族のイメージ、とりわけ家庭の中で女性に付与される近代主婦のイメージ（良妻賢母の規範意識）は広く浸透しており、近年では、家庭では良き妻良き母となり、外では自身の仕事に励む「超良妻賢母」が女性たちの新たな理想像になっている。⁽¹²⁾ 文学の世界でもそれを反映して、子育て騒動の中で成長していく若い夫婦の話を描いた池莉の「太陽出世」（一九九〇年）や息子の飛び級を実現するべく奮闘する教育ママを描いた畢淑敏「跳級」（一九九二年）、あるいは親族ネットワークから抜け出そうとする新しい都市家族のライフスタイルを描いた劉震雲「一地鸡毛」（一九九一年）など、子供中心の家族像が描かれるようになり、むしろ近代家族の要素を満たすような現象がますます顕著になっている。

今日の各国の近代家族の実態をあらためて概観すると、たとえば女子労働力率（二〇～四九歳）だけとってみても、スウェーデン八一％、アメリカ七六％、フランス七五％、ドイツ七四％、と軒並み七割を超え、中国都市部七二％よりも高くなっている。⁽¹³⁾ つまり近代家族の主要な要素である「専業主婦」の消滅である。現在、欧米諸国は近代家族の崩壊過程、あるいは脱近代家族の過程にあると言われ、この流れに中国も合流するかのようになり、有職女性の家庭と仕事の二重負担の問題など多くの共通する家族問題が議論され始めている。今日の中国の家族の形態およびそこから生じている問題は、欧米とずいぶん近いものになっているといえるだろう。

以下、本稿では伝統家族から近代家族へと移行していく二〇世紀前半の日本及び中国において、近代国家建設とともに形成され始めた近代家族——「新しい家庭」を、到達すべき理想像として捉えるのではなく、反対にジェンダー

の視点で批判的に描いた文学作品を取り上げ、これらの作品が提起する問題を具体的に論じていく。伝統的な家を飛び出して自由恋愛の末にようやく手に入れた「新しい家庭」が、決して女性の幸福を約束するものではなかったことに気づいた妻たちの苦悩や、この「新しい家庭」からの解放を模索する姿は、近代家族の中で女性たちが直面する問題、たとえば性別役割分業、ロマンチック・ラブ・イデオロギー、家父長制などの問題への関心を喚起し、今日に通じる占めて新しいテーマを含んでいる。近代家族を築くことが可能な条件下にあった作家たち、とりわけ女性作家たちは自らの体験を通していち早くこの制度としての近代家族に疑問を抱き始めていたのである。

三、謝冰心の「兩個家庭」

日本では、明治のはじめから中葉にかけて、西洋とくにアメリカでつくられたある種の家族イメージが定着し始め、時を同じくして「良妻賢母」の思想が普及し始めた。良妻賢母主義とは、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業に基づいて形成されたイデオロギーであり、言葉は日本産ではあるが、その思想は近代家族を支える女性の新しい規範として、近代家族の誕生と同時に欧米で生まれた近代文化イデオロギーである。前近代、女性に期待されていたのは「産む」母役割にすぎず、中上流層の家庭では日常の育児は乳母や女中にまかされていた。そして「教える」役割は主として男性家長・父の任務とされ、母の子に対する教育はせいぜい道徳教育や躾にとどまっていた。ところが近代になると、これら全てが母である女性に期待されるようになる。近代国家建設のために女性は家庭にあって、家事・育児・子供の教育に励むことによって健康で優良な子どもを育て、国家の安定・発展に貢献することが求められ

たのである。ただ、この良妻賢母の思想は、日本では儒教的影響を色どく残した夫唱婦随型にアレンジされ、以後その内容を「近代的」に書き改めながら、言葉としては死語になりつつつつあるものの、今日の日本女性の生き方に依然として強い影響を与え続けているといわれている。

中国における近代家族のイメージは、一九世紀末以降、この日本型良妻賢母による「夫唱婦随型家庭像」と西欧型良妻賢母による「夫婦平等型家庭像」、さらにソ連から伝えられる社会主義型の家庭像が混在して紹介されることになるが、五四新文化運動を機に、日本型良妻賢母およびその家庭像は、伝統的家制度と一緒に批判され退けられて、中国では定着をみなかったといわれている。⁽¹⁴⁾ この新文化運動の波に乗って彗星のように登場した謝冰心「兩個家庭」(一九一八年)⁽¹⁵⁾ は、西欧型近代家族を理想的なモデルとして中国近代小説において初めて作品化した数少ない小説の一つである。中国でも長い歴史の中で伝統的に子供の家庭教育は父親の役割であったが、「兩個家庭」は母親が、それも近代的な知識を子供に教える役割を担って登場する、全く新しい家庭小説であった。この小説には、ともに高等教育を受けた一組の夫婦と聡明な子供からなる「近代的な家庭」と、高等教育を受けた夫と無教養な妻および三人の子供からなる「前近代的な家庭」が対照的に描かれている。前者の妻は家庭の主婦として、子供に科学的な教育を施すことに力を注ぎ、女中に文字を教え、余暇に夫の翻訳の清書を手伝い、さらにみずから料理をし室内装飾に気を配る、典型的な近代主婦として登場する。一方の後者の妻は、子供に一人づつ女中をつけ、世話係は彼女たちに任せたまま、子供の教育などそもそも考えたこともないような遊び好きの女性として描かれている。この後者の女性像は、当時の上流階級の女性の中では平均的なものであったのだろうが、こうした妻のライフスタイルに留学帰りの夫は不満で、そのために夫婦関係はしっくりいかず、夫は酒に溺れるようになる。この小説のテーマは、小説の冒頭と最後に

繰り返して記されているように、「家庭の幸不幸は、夫の事業能力に影響を及ぼす」を証明し、「幸せな家庭」を具体的に提示してみせることにあった。冒頭の一段落をみてみよう。

二カ月あまり前、李博士という方が私たちの学校へ来て「家庭と国家の関係」について講義をした。家庭の幸せ不幸せは、夫の事業能力に影響を及ぼすと語り、中国とヨーロッパの古今の例をたくさん挙げて、とても説得力があった。

主人公の「私」は、この日、学校帰りに立ち寄った伯母の家で隣家の陳さんの家庭の事情を少し知ってしまう。台所は油と煤で黒く汚れ、勝手口のところはガラクタの山である。兄弟喧嘩をして男の子（長男の大宝）が激しく泣いているが、女中は自分の担当の子供しか構おうとしない。陳の奥さんが眠そうな顔で出てきた。

「どうして泣いているの？」他の二人の女中はさっと一人の男の子を抱き上げて行ってしまったが、大宝は弟たちを指さして言った。「あいつらが僕をいじめるんだ。いっしょに遊ばないって」。奥さんは叱りつけた。「そんなことでこんなに泣くなんて。李媽もなんとかしなさいよ。」李媽はうなだれてどう言っているかわからないでいたが、奥さんは腰をおろし手を振って言った。「弁解しないでいいわ。どうせあなたたちにはどうでもいいことなんですから。私ったらお金を使って何のために女中を雇っているのかしらね。坊やたちの喧嘩の手伝いをさせてるのかしら」。そう言いながら、ポケットから銅貨を一掴み取り出して大宝に渡した。「これを持って李媽と遊びに行つてらっしゃい。泣き声は我慢できないわ。泣くのは許しませんからね」（二八―三九頁）

このあと奥さんは着飾ってマージャンに出かけて行き、すれ違いに帰宅した陳氏は、街に遊びに出たまま暗くなっても戻ってこない子供たちを女中に呼びにやらせ、しばらくして自分も外出してしまう。以上の描写から、陳の奥さ

んが女中の管理ができていないこと、そのために家も荒れ、子供の躾けもいい加減になっていることが伝わってくる。一方、翌日「私」が訪ねた従兄弟の家はこれとは対照的に素晴らしいものだった。従兄弟の妻の亜茜は「私」の大学の先輩にあたり、久しぶりの再会だったが、亜茜はかつての生き生きとした姿を失わずに、「ますます落ち着いて穏やかな感じになっていた」。家の庭にはたくさんの花が植えられ聡明そうな男の子が渡り廊下のところで積み木をして遊んでいる。室内に入ると、西洋式の椅子やテーブル、ピアノが置かれ、鉢植えの花や絵、写真などが上品に飾られている。「私」には従兄弟夫婦の家庭が「どこもよく整理され清潔で、私が見た家庭の中で一番素晴らしいと思った」。夕食は亜茜の手作りであった。食後、坊やを寝室に連れて行った「私」は、真っ暗な部屋に一人で寝ても怖がらない坊やに感心する。以下は亜茜が科学的な教育を子どもに施していることがよくわかる言葉である。

「これまでお化けの話や悲しい話を聞かせて軟らかい脳を刺激したことはないの。空が暗くなることだって、あの子は暗くなる理由を知っているから、もちろん何を怖いというのか分からないはずよ」(四三頁)

この日、従兄弟とはイギリス留学時代の友人でもある陳氏が訪ねてきた。彼の悩みは仕事上の不如意だけでなく、家庭の不幸も大きかった。それから二ヶ月後、陳氏は体を壊して早死してしまう。

このように、二人の主婦をこれだけはっきりと描き分けているため、読者の誰もが迷わず亜茜の家庭に軍配を挙げると違いない。家政を賢く切り盛りし、仕事に疲れて帰宅する夫を暖かく迎え入れるオアシスのような家庭を作っている亜茜は主婦の理想型であるからだ。謝冰心は、陳の奥さんが夫の死後、実家に戻って行ったことに触れながら、経済的自立のために女性が教育を受けることの重要性に言及しているが、亜茜が高等教育を受けながら経済的な自立を果たしていない点には全く関心を寄せていない。それは謝冰心の女子教育を重視する理由が、まずは賢い専業主婦

(つまり良妻賢母) になるためにあり、女性の経済的自立の問題は結婚後の万一のときに備えての保険程度にしか認識されていなかったからではないかと推測される。当時、女子教育を女性の経済的自立と直接結びつけて捉えていた社会主義系の女性解放の流れとははっきり異なっている。

かくして、中国文学においてはじめて、情愛夫婦＋子ども中心、という西欧型近代家族のイメージが見事に小説化され、女性の役割も、教養があり高い家事能力を有する妻＋教育者としての賢い母、という良妻賢母のイメージが鮮明に提示されたのである。謝冰心はこの一〇年後に「第一次宴会」(一九三〇年)⁽¹⁶⁾という短編を書いているが、女性の家事能力にたいする彼女の期待が大変強かったことがこの作品からもうかがえる。この小説は、引越した後間もない新婚夫婦の家で外国人を招いてパーティーを開くことになり、新妻が使用人を指示してきばきと準備を整え、母から贈られた花瓶をテーブルに置いて最後の仕上げをする。夫は妻の優れた家事能力に驚き、愛情のこもった眼差しを注ぎ、客が帰った後、妻の苦勞を労うという話である。新婚早々に大役を果たした新米主婦の満足感とそれをあたたかく見守る優しい夫、という組み合わせはまさしくモダン・ファミリーの典型であろう。

ところで、文中に次のような一段がある。

皆は各国の風俗について話をしながら、次第に婦人問題、政治問題にまで話が及び、座は大いに盛り上がっていた。だが瑛はこの時、反対に黙りこんでしまい、少し疲れを覚えて、ただ静かに聞いていた。

C教授は彼女のおしゃべりが止んだのに気づいたようで、そこで彼女にいろいろ日常の細かい事をたずねた。彼女も元気を奮い起こし……彼に何人娘さんがおられるのか、今どこにお住まいなのかとたずねた。(五五頁)

この部分は、社会問題に無関心な主婦への風刺として書かれているのではない。一つの仕事が終わりに近づき、ふ

と緊張がとけた主婦にたいする作者のいたわりである。謝冰心はさらにこの後一〇年程して『談女人』（一九四一年）⁽¹⁷⁾を書いているが、これには、抗日戦争中に疎開を強いられた人々の耐窮生活、その中で家族のために犠牲になる女性たちの姿が同情を込めて描かれている。謝冰心は仕事を持つ女性を批判することはなかったが、仕事と家庭を両立させることは不可能だ、という前提のもとに、戦争によって本来の近代主婦としての能力を発揮できなくなった女性たちの苦勞話がつづられており、その「後記」には「私はある真理を発見した……男は仕事に生き、女は愛に生きる」と記している。そして「女のひとは親子の愛、兄弟愛、夫婦愛、友愛を大切にする。……そこで愛する者のために犠牲になることも厭わない。……しかし女の人に愛するのをやめなさい、というのは無理なことだ。神様は女のひとに愛せよとお命じになり、その愛によってこの世界を維持していくことを定めたのである」と述べ、謝冰心の思想が「兩個家庭」の時期から基本的に変化していないことがわかる。彼女が人道主義・博愛主義の精神に基づき女性の愛の力、とくに母の愛を讃えることは、それ自体は素晴らしいことであるが、それが女性の自己犠牲や母役割を過度に強調し古いジェンダーの固定化に寄与したり、女性の経済的自立を阻むことに繋がるとすれば、たとえそれが彼女の本意ではなかったとしても、やはりこれらは謝冰心の思想的限界として指摘せざるをえないだろう。

四、中国におけるイプセン『人形の家』の誤読と受容

イプセン『人形の家』（一八七九年）⁽¹⁸⁾は、胡適・羅家倫の共訳によって『新青年』四卷六期（一九一八年六月）に掲載された。この時、夫婦問題を問いかけた家庭劇としての『人形の家』は、中国ではその初め、封建的な家を出た

若者の物語として意識的に読み替えられて紹介され、ノラは「古い家」から解放された勇氣ある新しい女性だと称賛された。しかしながら、『人形の家』は、欧米における近代批判として、具体的には近代家族批判を本質とするものであった。ノラの夫は中国の伝統的家族の家長のように抑圧的な暴君ではなかったし、ノラも愛する夫と子供に囲まれて幸せに暮らしていたからである。ノラが問題にしたのは「前近代」の古い思想ではなく近代家族という「近代」が内包するジェンダーの非対称性であったのだ。「お前は何よりもまず妻で、母親だ」という夫の言葉に対して、ノラは「私は、何よりもまず人間よ、あなたと同じくらいにね」（一六五頁）と反論し、自分自身が何者なのかを知るために夫と子どもを残して「家」を出ていく。ノラにわかったことは、妻であり母であるよりも前に、まず自分は人間であるということ、もう一つは夫とはこれまで「真面目な言葉を交わしたことは、一度だってなかった」（一五九頁）ということ、さらに自立もできていない自分に「子供を教育する資格はない」（一六二頁）ということだった。だからまず自分を知り自立しなければならぬと決意したのである。ノラは近代家族という枠組みそのものを批判して家を出たのではないが、「わたしもあなたも、一人とも生れ変わって……わたしたちの共同生活が、真の結婚生活になるようにならないければ」（一七三頁）という言葉には、女性だけでなく男性も視野に入れた人間解放のメッセージがこめられており、それを阻む制度としての近代家族にたいする強い批判意識を読み取ることができる。

パパと一緒にいたころ、パパは何によらず、自分の思うことをあたしに言っただけ。だからあたしも、同じように考えた、……そして、もし、考えが違えば、あたし、隠したわ、……だって、パパには気に入らなかつたでしょうからね。……それからあたしは、この家にやってきた……」「おれたちの結婚を、何という言い方をするんだ？」「パパの手からあなたの手へ移ったという意味よ。あなたは何でも好み通りにやってきたわ。だからあた

しも、あなたと同じ趣味を身につけたの、……それとも、そんなふりをしたか、……よくわからないわ……多分、両方ね、……あるときはああ、あるときはこう。いま、振り返ってみると、あたしここで、乞食みたいに暮らしていたような気がするの。」(一六〇～一六一頁)

そして、「あたしは、あなたの人形妻だったのよ、実家で、パパの人形っ子だったように。それに子供たちが、今度はあたしの人形だった。」(一六二頁)とノラが言うように、女性が娘から妻になるということは、「父の支配」から「夫の支配」へと主人を替えることにすぎず、夫のあやつり人形でありながら、一方で母として子どもを思うままにあやつる支配者になっていく。このように、近代家族は愛というベールに覆われているがゆえにその中の支配構造が見えにくくなっているが、イブセンはノラという楽天的で無邪気な一人の女性の「目覚め」と「家出」を通して、近代家族の虚偽性を暴いていったのである。この小説が、おりしも一九世紀末から二〇世紀初めの第一期フェミニズム運動の高まりの中で女性解放の文脈において世界中で広く読まれたのは、イブセン自身がいくら女性問題を論じたものではないと否定しても、フェミニズム思想の根幹がこの女性の個としての自立の問題にあったことを思えば、むしろ自然の流れだったといえよう。

しかしながら、中国では『人形の家』が紹介された当時、恋愛結婚後の家庭で生じる「ノラの問題」について具体的に語られる余裕はなかったかにみえる。当時の結婚が親の取り決めによる旧式結婚がほとんどだったために、恋愛結婚を勝ち取るところがスタートでありゴールであって、まずは伝統的家制度からの解放に関心が集中したためである。

欧米における近代家族は、まず一九世紀半ばのヴィクトリア家族と呼ばれる、情愛夫婦・夫中心・核家族のパター

ンに代表され、次に二〇世紀初めの第一次世界大戦後、家事使用人が中流階級からいなくなる頃に夫婦同等型近代家族が大衆化していったと考えられているが、イプセンの描く近代家族は前者の典型であり、明らかに夫中心の家族である。イプセンの『人形の家』が中国に翻訳紹介されて三ヶ月後、胡適は「美国婦人」（『新青年』五卷三期 一九一八年九月）を書いて、アメリカの女性たちの、必ずしも従来 of 夫婦関係や家庭という枠にとらわれないライフスタイルを「超良妻賢母」として紹介し、男女の「自立した精神」こそがよき社会の不可欠の条件であると力説している。

実際のアメリカの近代家族がどうであったかはひとまずおいて、胡適が理解した当時のアメリカの新しい近代家族モデルからみると、『人形の家』の家庭は（事実、それより四〇年前の作品であったから）、すでに時代遅れの古いものに映ったことは確かであろう。そのため、『新青年』紙上でイプセン特集を組んだ時、胡適らは意識的にその古さを強調することで、『人形の家』を中国の当時の目前の問題であった伝統家族批判に通じる作品として紹介し、ノラは「封建的〈家〉」の枠組から脱出した「革命の天使」として讃えられたのである。興味深いのは、この意識的な誤読によって、読者の関心が男女共通の伝統的家批判に集中し、近代家族の中で生じる女性固有の問題への関心がかなり希釈されてしまったことである。

だが、これより数年後、一部の女性作家たちによって、早くも『人形の家』のメッセージを正しく受容した数多くの作品が書かれるようになる。一つの比較の視座としてまず日本の女性作家の作品からみていこう。

五、家のしがらみからの解放を求めて——伊藤野枝の結婚

伊藤野枝（補注一）は福岡の貧しい瓦職人の長女として生まれた。遠縁の叔父の援助で上野女学校に進学したが、卒業と同時に親の取り決めた意に沿わぬ結婚を強いられ、まもなく婚家を逃げ出した。そして、女学校時代の英語教師辻潤と結婚する。だが、辻は野枝を引き取ったことで失業、さらにその後も職に就く意欲をなくしてしまったために、一家は窮乏生活が続いていた。野枝は青鞥社の事務や編集を手伝うかたわら少しづつ小説や批評文を書いてわずかな収入を得、借金をしては苦境をしのいでいた。伊藤野枝「惑い」（一九一四年）⁽¹⁹⁾と「乞食の名誉」（一九一八年）⁽²⁰⁾はこの間の辻との「新しい生活」を描いた自伝小説である。主人公は家事と育児に忙殺される毎日に「自分では、うっかりしているうちに、いつか、もうこうして家庭というものの内に閉じ込められてしまったのだ。私はもう、自分ひとりきりの自由というものはないのだ。……こんな生活をするはずじゃなかった。」（二二六頁）と後悔し絶望感に襲われる。ようやくわずかな時間をみつけて本を読んでいる彼女に姑の声が飛んでくる。彼女に直接言うのではなく、這って近づいてきた赤ん坊に向かって言うのである。「昼日中子持ちが机の前で本を読んでいるなんて、とんでもない話だ。する事は後から後からといくらでもありますって、坊やそうおいしい。あんまりお吞氣がすぎますよ。」（二四〇頁）姑は彼女の読書を道楽としかみず、彼女に当然のごとく嫁役割を要求してくるのだった。しかし頼みの夫はいえ「骨の折れないものを読むくらい」の事は、守をしながらでもできるだろう？ 夜だって、こうして相応に時間はあるじゃないか」（二四三頁）と彼女の読書のペースが違いことを笑いこそすれ、少しも力になろうとしなかった。

そして夫の何事にも逃げようとする態度に思想的な違和感を覚えるようになった彼女はとうとう「出よう、出よう、自分の道を他人のために遮られてはならない」(二五二頁)と決心する。野枝は旧式の結婚から脱出し、恋愛によって「新しい家庭」を手に入れたかに見えた。しかし、経済的困窮と家族のしがらみに再び捉えられ予想外の苦汁をなめたのである。

つづく「乞食の名譽」はそれから一年後、青轡社の仕事を野枝が平塚らいてうから全て引き継いだ頃の辻家での家族の確執が描かれている。主人公のとし子が仕事をもち、手伝いの者が来てくれるようになって、「家族の人には、大変な迷惑でもふりかかったように感じられた……母親は例のとおり、子供を持った女が、終始出歩くことの不可をしきりに言った。……母親に露骨にいわせれば、彼が遊んでいるために、主人としての男の権威が踏みつけにされるのだというのであった。」(二六七頁)しかし、とし子は「たとえ男に何かの収入の道がついたとしても、彼女は決して母親の希うような嫁になりおおせる事ができない」(二六八頁)と思い、これからも続くであろう姑との確執に暗澹とした気持ちになる。だが、彼女にとってこの頃ほど学問への欲求が強まり、また知識をよく吸収した時期はなかった。「一步家の外に踏み出すと、彼女は、自分のみすばらしさ、意気地なさを心から痛感した。……一番若い、一番無知無能な自分が、何にも出来ずに家の中でぐずぐずしているのだ、と思うと、何ともいえない情けなさ臍甲斐なさを感じるのであった。……とにかく彼女は家族の人達から非難されようと、少しくらい厭味を聞かされようと、自分の勉強だけは止めまいと決心した。」(二六六頁)彼女は自分が因習の中に生活しているのは、「自身の中に深くひそんでいる、同じ因習のせい」であり、それは「理知的な修養の力によって除くより他はないと」(二八〇頁)考え、自己完成による解放を念じていた。しかし、彼女は無政府主義者エマ・ゴールドマンの伝記を読み、みずからを

捉えている因習の背後にある大きな社会を知る。家庭という私的領域の問題が決して個人の努力で解決できるものではないこと、その背景には社会があり、国家があることを彼女は見抜いたのである。彼女はエマの伝記の冒頭に記された、乞食の名誉を以て死ぬかもしれないような〈商売〉（革命）に頭がクラクラするほどに引きつけられた。「乞食の名誉」もどんなに尊いものだからいけない」（二七八頁）と彼女は家庭からの脱出を本気で思うようになる。

野枝は一九一六年四月、四年に及んだ辻潤との生活を解消し、生まれたばかりの次男を連れて家を出る。そして九月にはアナキスト大杉栄と同棲生活を始める。当時ジャーナリズムを賑わせた大杉をめぐる女三人の四角関係で野枝は恋の勝利者となったのだ。この後、二三年の関東大震災の混乱の中で白色テロルにより大杉とともに絞殺されるまでの七年間、野枝は大杉との間に五人の子を出産し、ためにアナキストとしての活動も小説や評論文の数もかなり少ない。大杉との生活は彼が愛妻家で子煩悩であったため、途中で大杉の入獄を経験したものの、経済的にも安定して幸せな家庭生活だったようである。しかし、ようやく実現した「近代家族」の中で、野枝は再び悩み始めたのである。「或る妻から夫へ」（一九二一年四月）²¹は、この頃の野枝の様子をよく伝えている。

私共の本当の結合の意味は、夫婦であるというよりむしろ、一つ道を歩く、一つ仕事をする、最も信じ合う事の出来る同志になるという事の方に本当の目的があった事は、お互いにいちばん最初からよく知っていた事です。……けれど、私達の「家庭」という形式をそなえた共同の生活が、いつの間にか、私をありきたりの「妻」というものの持つ、型にはまった考えの中に入れていたのです。……そして今の感情はいつの間にか、その大事な仕事の上に臨む場合にすらも、「良人の仕事に理解を持つ事の出来る聡明な妻」という因習的な自負に打ちまかされるようになったのです。（四三、四頁）

この思索の結果は、もう一つ他の事を私に教えてくれました。それは、私達が常にいっしょに住んでいる事が、どれだけ私自身を陥れているかという事です。「妻」というものの持つきまりきった考えかたが、私自身の自由な成長を妨げていた事に、私はその時までまったく気づかなかったのです。(四三六〜三七頁)

自分に対する親の越権を憤慨し、反抗した人達が、自分の子供達にいたいどんな態度でのぞんでいるでしょう。……ただ子供が小さいからというだけの理由で、子に対する親の越権ではないとどうしていえるでしょう。それから夫婦関係です。……Better halfという言葉が、どれだけありがたがられているでしょう。愛し合って夢中になっている時には、お互いに出来るだけ相手の越権を許して喜んでいます。けれども、次第にそれが許せなくなってきた、結婚生活が暗くなってきました。もしもたいして暗くならないならば、たいいていの場合に、その一方のどっちかが自分の生活を失っているのですね。そして、その歩の悪い役まわりをつとめるのは女なんです。そしてその自分の生活を失くした事を「同化」したといってお互い喜んでいます。……けれども、実際には、どんな新思想をもっている男達でも「同化」されるのは嬉しいと見え……どんなに「理解」しあって、愛し合っているいっしょになった夫婦でも、夫婦になれば、妻は良人の生活を一から十まで理解して同情して、かゆい処に手が届くように暮らさねばならぬらしいですね。(四四〇〜四四一頁)

ここに語られる言葉は、イブセン『人形の家の』のノラの言葉に、またこれより三年後に書かれ始める宮本百合子『伸子』の言葉に、時空を超えて共鳴している。「新しい家庭」の中で、女性は「愛」の名のもとに夫に同化されて個としての成長をはばまれる被害者としてだけでなく、子供に対して「愛」の名のもとに親のエゴを押しつける加害者にもなっていると野枝は述べている。そして大杉と同志的な結婚をしたはずの野枝でさえも、一旦家庭の中にはいれ

ば夫と妻がヨコの関係ではなくタテの関係になってしまふこと、原因は「結婚という形式」そのものに根ざしていることに野枝は気づき始めたのである。この後、野枝は実際に別居を試み、当初は半年の予定で、実際には一ヶ月ほど実家に戻り執筆に専念している。野枝もまた「新しい家庭」からの解放を模索し始めていたのである。

六、男と女の力学——田村俊子『彼女の生活』⁽²²⁾

日本の近代女性文学の中で近代家族が内包する性差のしくみ（セックス・ジェンダー構造）を見事に看破したものに田村俊子（補注二）の『彼女の生活』（一九一五年）がある。この作品の興味深いところは、家庭の中に囲い込まれた女性が「愛」の名のもとに次々に譲歩していく姿を描いているだけでなく、ジェンダー規範にとらわれているがゆえに妻の苦しみをどうすることもできない夫のジレンマと居直りにも視線が及んでいることであろう。主人公の優子は当初、結婚に対して否定的であった。

山車の人形が後ろから押され前から曳かれて泳ぎながら動いて進むように、女はまったく魂を閉ざしてその人形のやうな身体を後ろから押されて前から曳かれて一日々と盲目の日を果たして行った。……自分はどうな事があっても然う云ふ女の生活の道を追ふことは厭だと思った。自分と云ふものをこの人生に飽くまで自分として生かして置きたい。男の自我心に自分の魂を失はされるやうな結婚生活は求めてはならない。（四頁）

そのため優子は新田と恋に落ちたとき、

男が肉を求めようとする感情よりも、結婚を求めようとする意志のほうに、優子は却って男の卑怯さと醜さが

感じられた。肉を恋人に許すことは優子の永遠の自由であつたけれ共結婚に應じることが自分の生涯を男の手によつて閉ざされることだ。男が自分に結婚を迫るのは、自分の身体に一生飼ひ殺しの鎖り鎌を打ちかけやうとするのと同じだと優子は思った。(五〇六頁)

このように、優子は性と愛と結婚が三位一体となつた近代のロマンティック・ラブ・イデオロギーに早い時期から危機感を抱いていたが、それでも新田の情熱に負けて結婚を承諾してしまふ。そして二人の結婚生活は互いの自由を確保するために部屋と経済を別にし、家事労働は下女を雇うことでスタートした。しかし、家事を下女に教えこむことに疲れ、夫婦で分担することになると、いつしか夫の新田はそれを怠けるようになる。

毎日の生活の事実が、新田自身の社会に対する新たな男の責任と義務とを強ひずにはゐなかつた。——新田は其れを意識するほど、いかにも自然に、自分の仕事は重く大きく、……家政の仕事は極く軽いものとして自分の行為に現はれてきた。(一一三頁)

家事をすべて引き受けるようになった優子に新田は複雑な気持ちを抱く。

人生に生きることに澆刺としてゐた優子が、まるで意気を失つて顔色も蒼白になり、さうして始終家内にはかり閉じこもつてゐるのを見ると、新田は唯優子が憫れで堪らなかつた。出来るだけ複雑な家政の用と優子とを引き放してやり度いと考へながら、新田は直にその努力にさえ自分が疲れていった。……自分の書齋に籠つて自身の仕事に没頭してゐるときの優子を見るよりも、新田には妻らしい感情を持つて自分に接してくれる時の優子の方に一層深い愛を感じるのであつた。……優子はそれを全て知つてゐた。……自分が善良な妻である時を喜ぶやうに見える新田の突然な表情が、時折無意識のうちに新田の面によつてきて彼女を驚かすことがあつた。優子は

それを感じるほど、自分の生活に失望した。(一四〇—一六頁)

いつのまにか男は外、女は内という性別役割分業の關係が生じていたのである。しかし彼女は家事と仕事を両立させることが「強い自分」を示すことであり、「愛の充実」であると考えた。ところが、夫は彼女が文学仲間である若い男性たちと交際することまで嫉妬心から禁止するようになる。猛烈に夫を非難する優子。しかし、新田は「私は間違っている。けれども何うする事もできない」(二五頁)と居直り、結局優子は夫のために彼等との交際を止めてしまう。そして窒息状態に陥り「愛の信仰なぞと云う事は自分を墮落させる事だ」(三三頁)と反省し、再び自分の書齋にこもるようになる。ようやく書き上げた文章が評判になり幸福感に浸る優子。「女が一方に家政を整頓しながら、片方では男と同じ歩調で社会の上に立つて行かうとする事は、確かに男よりも二倍の仕事をすることになる。力の差は兎に角、その量の上では女の方が男より優越する」(三六頁)と、優子は二重役割を自ら進んで引き受けようとしたのである。そして思わぬ妊娠という事実には再び精神の混乱をきたすが、いざ母親になってみると子への愛にからめとられ、またも「愛」の信仰によって盲目にされる。彼女はそれでも以前にまして多くの文章を書くようになり、二重、三重の生活をこなすことができた。「それは誇りではなくって愛と名附くべきものであった。子に対する愛、良人に対する愛、さうして自身に対する愛であった。すべてが愛であった。……今度は自分自身が愛の権化であるやうに解釈されてきた。彼女は喜びに輝きながら、自分の世界を創造することにも怠らなかつた。」(四五—四六頁)こうして、結婚という制度を懷疑し自覚的に自由な男女の關係を求めてスタートした彼女の結婚生活は、いつしか近代家族の枠組の中にすっかり絡め捕られてしまったのである。

謝冰心は『談女人』『後記』において「女は愛に生きる」と語り、それを女の運命だとして「愛」のために犠牲に

なる女性たちを同情をこめて描いた。一方、田村俊子もまた謝冰心と同じように、この小説を「哀れむべき女の必然の運命から到底逃れられないと知った時、彼女はまた新奇な〈愛の生活〉を叫びだすだろう」（四六頁）と「愛」の信仰でしめくくっている。しかし両者の違いは近代家族にひそむジェンダーの問題への意識の差にある。概して問題意識の希薄な謝冰心とは対照的に、近代家族のもつ「愛という名の抑圧構造」にここまで肉薄しえた田村俊子の『彼女的生活』は当時の日本文学の中でも群を抜いた存在であり、この作品で女性解放の糸口を提示できなかったのは、田村の限界ではなく「近代家族」の限界であり、「近代」の限界であったと言えるだろう。

七、近代家族批判——宮本百合子『伸子』⁽²³⁾と佐多稲子『くれない』⁽²⁴⁾

『伸子』（一九二六年）は宮本百合子（補注三）の最初の結婚とその破綻を描いた自伝的小説である。この作品を近代の結婚制度批判の角度から鋭く読み解いたものに駒尺喜美『伸子』にみる結婚⁽²⁵⁾があり、これに本稿でさらに付け加えるべきものはほとんどないように思われる。以下、主として駒尺氏の読みに沿いながら主人公伸子の結婚観をみていきたい。

大正七年（一九一八年）伸子は仕事で出張中の父とともにアメリカのニューヨークに渡り遊学するが、翌年現地で古代言語学を専攻する貧乏学者佃と恋愛し結婚する。佃の現地での評判はすこぶる悪く様々な風評を乗り越えての結婚であった。帰国後、一時伸子夫婦は伸子の家に同居するが家族との折り合いが悪く、佃が職を得たこともあり、ようやく二人は家を出て独立した生活をはじめた。伸子の結婚生活への疑問が具体化してくるのはこのころからである。

伸子は結婚するにあたり佃に、佃を愛しているのと同じ程度に文学という仕事を愛していること、家事が下手で、子供はつくりたくないことを伝えていた。佃は「私は家政婦を求めているのではない」「自分をすてても、あなたを完成させて上げたい」(九九頁)と言いつ切るほど理解のある男性であった。しかし、実際に二人の生活が始まると、やがて伸子は夫と心が通じあわず孤独を味わうようになる。「良人が、言葉でする愛の誓で、愛す愛すただけ云えば万事解決する、と思っているのが味気なかった。愛しても、食物はいるように、愛しても、伸子には活発な生存がいたのであった。毎日の細かいことでは、互いの心持について、まるでやり放しでとり合わず、伸子がやり切れなくなつて涙をこぼすと、急に熱烈に、これほど愛している心が通じないのかと訴えられる。」(二三頁)伸子は耐え難くなつて祖母の田舎へ旅に出る。駒尺氏は、この部分について作者の当時の日記を引用しながら次のように述べる。

彼女が旅行に飛び出す時は、家においては自分の仕事ができないので、それに耐えきれずに出るのである。「毎日の細かいこと」と一口に言つてしまっているが、それが大原因なのである。……「此那ことではまるで、家のことをしに結婚をしたようなものだ」(『日記』一九二・三・三一)と思わずにはおれない。百合子の日記を読むと、彼女は家事の煩わしさに殆ど悲鳴をあげている。……伸子が、佃と精神的に通じるところがなかったことに苦しんだのも事実だが、それと同じくらいの大きさで、妻の肩にかかっている家事にも苦しんでいる。しかしそここのところがもう一つ具体的に書かれていない。

駒尺氏は、これを時代的制約ゆえだと理解を示しながら、以下のような鋭い視点をすでに獲得している百合子であつてみれば、なおそのことの不足を惜しんでいる。たしかに、小説には「細君という席が、彼女にびったりしないのであった。……伸子に分かつていたことは、生活が回転する幅の狭さ、重さ、若々しい柔軟性の欠乏であつた」(二

○三二〇四頁、「男の人は良人になったって、どこまでも、その人を通して。細君は何だか、生まれつき以外に、細君の属性とでも言うものが要求されるみたいね。細君業は、女の適応性を極端に発展させる点で、危険じゃないかしら？」(一九四頁)など、百八子は結婚と同時に女性に与えられる妻役割つまり「細君という席」の不自然さを度々語っているからである。

そしてさらに、伸子は世間一般の女性からみるとはるかに自由であったが、「そういう日常の些細な自由をさえ、妻となれば人特権のように貼紙つきで与えられるという云い難い憂鬱」(三〇八頁)を覚え、そこに「夫の支配」を敏感に感じ取っている。夫ならば当然の自由が、妻は夫から恩恵を「与えられ」なければならぬとまじさに伸子は怒りをもつ。ことごとくに「伸子が幸福になることならなんでもします」という、一見、愛に満ちてみえる佃の言葉に「妾に相手の感謝を強いるような」(一九一頁)ものを感じて伸子が傷つくのは、駒尺氏によれば「佃はいかにも理解のある夫であるが、それは実は理解ではなく、許しているのである。支配者は対等の場には立てない。支配するか許すかである」からであった。結局二人は破局を迎えるが、伸子が自身の結婚生活を通して分かったことは、破局の原因は決して佃という男性個人の性格によるものではないということであった。「佃は、伸子にとって最初の良人であった。そして、恐らく最後の良人となるらしかった。伸子自身、もっと違った女に生れかわるか、或は一般の性生活の常識が、ある点変化でもして、もっと無理なく、ならなければ。つまり、伸子にとって、佃と夫婦生活がやって行けないのは、ただ對手が佃だからと云うだけの理由ではないのであった。」(三五二〜三五三頁) 伸子の批判は、夫と妻の関係が常に「与える側」と「与えられる側」というタテの関係として位置づけられ、それに合わせてそれぞれの役割が固定的に割り振られる近代の結婚制度つまり近代家族そのものに対する批判に根ざしている。振り返れば、

伸子は佃との結婚を意識し始めた時から、田村俊子『彼女の生活』のヒロイン優子と同じように、結婚そのものに対して強い疑問を抱いていた。

人間は結婚すると、なぜあかも、人生のあるゴウルに達したように落ち着いて、世間と調和的になってしまふのであろう。多くの男女が、何か自分ならぬ者に導かれるようにして、一生をいつの間にかやら過していく。

……愛し合う男女にとって、結婚が唯一のものであるだろうか。男女の愛は、本来が、そういうちょっと狭く、狭いような性質のものであるだろうか。人生には何かもう少し違った形があってよかりそうなものだ、という気が、結局にゆくと、いつも伸子の心に強く生じるのであった。(八五頁)

だがそれでも、大正後期の時代の空気をたっぷり吸って育った伸子は、恋愛結婚に自由と解放の契機を見出し、「互の愛をまっすぐ育てられる位置において二人が、より豊富に、広く、雄々しく伸びたい」(八五頁)のために、結婚という形態を受け入れたのである。イプセンの『人形の家』では最後の場面で夫がノラを引き止めるために、宗教や良心を持ち出し、最後には「愛」をもちだした。『伸子』でも、佃は「どうしてこんなに愛している私のところから去ろうとするの?」(四五三頁)と愛をもちだす。鳥籠の網を鋏で切って鳥を解き放った佃は、舞い戻って来た一羽の十姉妹を見て「鳥でさえ帰って来るのに」と言うが、伸子は「飼鳥になつては堪らない」(四五六頁)と苦々しく思うのだった。このように、小説『伸子』は、性と愛と結婚を一つに結びつけるロマンティック・ラブ・イデオロギーの自己矛盾と、それを基盤にして形成された近代家族に生じる愛という名の性支配の本質を、伸子という一人の近代女性の恋愛結婚とその破綻を通して、見事に描いているといえるだろう。

同じく女性の自立と家庭をめぐる問題を描いた作品としては、夫の愛人問題や党活動を背景に仕事と妻役割に悩む

女性を主人公とする佐多稲子（補注四）『くれない』（一九三六年）が有名である。この作品も作者の実生活を素材にした作品であり、ファシズムが猛威をふるい転向者が続出した昭和の初期を時代背景としている。ヒロインの明子は作家、夫は評論家で、共にプロレタリア文学の立場に立ち、思想的にも人間的にも互いに助け合って成長してきた筈だったが、夫の入獄中の妻の成長ぶりが夫の感情を複雑にし、深刻な対立を繰り返すようになる。二人が同じ家の中で仕事をするようになると明子は仕事への焦燥も手伝って感情の上で微妙な苦しみに悩まされ、同時に夫の古さと自分の中の古さにも気づいていく。「夫と子供」といって、明子は知らず知らず別な自分が誰からともなく要求されているように照れるのである。……いつか自分が女房らしく振まっている。すると今度は自分が妙にぎこちなくなる。」（七頁）「二年間の留守中に、私はほんとうに、ひとりで暮らす自由さを味わった。それはなんと悲しいことだったろう。夫を愛していながら、独り暮らしの自由さを希ませる矛盾は、女の生活のどこにひそんでいるのだろう。」（一九頁）明子は、その根底に慣習的行為として身体化された性別役割分業の存在に気づき、戸惑いを隠せないでいるのだ。一方の夫は、自分の仕事に協力的でない妻が、たとえ生計を支えている存在であっても、疎ましく思われてくる。そして今度は明子が検挙され留置されている間に夫に女性関係が生じて夫婦間に亀裂がはいる。二人は別居について話し合い、明子は「私もいい細君でいればよかったなあ。あなたの助手になってねえ。きっと模範的な奥さんになっていてよ」（四・二頁）と言うが、作家として飛躍したい情熱を押し殺して、我が儘な夫の喜ぶ妻になりきることとは出来ず、愛憎が激しく交差する中で神経も肉体もすり減らしていく。結局、夫の女には別に男がいることがわかり夫は戻ってくるが、明子の心は暗く乾いたまま、夫婦の破局を暗示して小説は終わる。

以上、日本の女性文学に描かれた近代家族批判を伊藤野枝、田村俊子、宮本百合子、佐多稲子の作品を通して概

観した。これらは、大きくは近代文学の特色の一つである女性の自我の覚醒（とそれによる家庭の崩壊）をテーマにした作品群の中に位置づけられるが、さらに詳細にその「覚醒」の内容をみると、作者たちの関心が、近代的自我に目覚めたばかりの女性たちの新鮮な喜びや新たな決意にあるのではなく、むしろすでに近代の思想の洗礼を受けている女性たちの、家庭という場における「近代」との戦いに注がれ、その戦いを通して女性の自己完成の道を模索したものであることがわかる。近代の産物の一つである女性解放思想が、まさに近代批判から出発した同時代批判の理論でもあり、必然的に女性たちの自己批判・自己解体を伴うものであることを、これらの作品は実によく伝えているといえるだろう。

八、廬隱が描く主婦の憂鬱

宮本百合子『伸子』が雑誌『改造』（一九二四年九月―一九二六年九月）に連載されていた頃、中国では魯迅が「傷逝」（一九二五年一〇月執筆²⁶）において、新しい家庭の中で生じた「愛の凝固」と、その悲劇的な結末を描いている。「傷逝」は今日なお作品研究において種々の疑問と議論の余地を残している作品であるが、子君と涓生の二人の生活が破綻へと向かって行く原因については、涓生が解雇されたことが全てではなく、すでに新婚生活のスタートからその兆しが見られるというのがおおかたの論者の一致するところとなっている。そしてこの見解に基づき本稿の関心に沿った解釈を試みると、涓生が解雇される前の新婚生活を描いた第五、六段落には、『彼女の生活』や『伸子』に共通する、近代家族という枠組のなかでの愛の姿が問題にされていることに気づく。とはいえ、ここで思いつくま

ま、近代家族批判に結びつけた「傷逝」論を展開するような愚は避け、第六段落において二人の感情に微妙なズレが見え始める部分を確認するにとどめたい。本稿のテーマとの関係ではそれで十分であるだろう。

「平和と幸福は凝固しようとするものだ」という言葉で始まる第六段落には、二人の間に真の会話がなくなり、すでに「思い出話のなかで、かつて味わった、衝突のあとの和解がもたらすあの生きかえったような喜びを、咀嚼するだけとなった」ことが語られる。その原因は涓生からみると、子君が家事に忙殺され、読書や散歩はもとより、二人でゆっくりおしゃべりをする時間もなくなってしまうことにあった。そして家主の奥さんとの小さな揉め事を涓生に隠し、自分一人でその不愉快を引き受けようとする子君に涓生は「おもしろくない」ものを感じてしまう。だが涓生自身も、家庭の経済的責任を一人で背負い、「僕の路も鋳型にはまったようになつた。……家から局へ、局から家へのくり返し」の生活が始まっていた。夫としての責任感とその裏返し of 抑圧感から、涓生は自分の生活が狭く、単調になつたような気がしてくる。「愛情はたえず新しく、育て、生みだしてゆかねばならない」と語る涓生と、その言葉にうなずいた子君。この二人の純粹で、熱烈で、それゆえに反社会的だった愛情は、家庭を持つと同時に瞬間に凝固し、二人の關係に質的変化が生じてきたのである。涓生は子君が懸命に妻役割をこなしている姿をみて、「僕は食ふなくていいんだから、そんなに骨を折っちゃいけない、僕は一度、そう忠告したことがあった。」しかし「彼女はちらと僕を見ただけで黙っていた。表情もどこやら淋しげだった。僕もやむなく黙った。そして彼女は相変わず骨折りつづけた」のである。だが、子君が何も言わず「表情もどこやら淋しげだった」のは、自分が家事を止めるのが無理だと分かっていたからだ。もし、涓生の言うように妻が食事を作るのをやめたら、いったい誰がその代わりをするのだろうか。夫がたまに手伝うくらいでは根本的な解決にはならない。家庭を持った途端に性別役割分業がこ

く自然に成り立ってしまう現実を前にして、子君は所与の妻役割を勝手に降りることはできず、また涓生が「やむなく黙った」のも実はそれがわかっていたからであろう。この後ほどなくして涓生が失業すると、涓生は子君に結婚前とは正反対の凡俗さを感じて落胆し、次第に嫌悪感を募らせていくが、子君にしてみれば、ただ近代家族が要求する平均的な妻役割を果たそうとしたにすぎなかったのである。このように、「傷逝」には、子君の豹変ぶりが涓生の目を通して批判的に描かれながらも、さらにこの手記を書いている涓生とその創作者である魯迅が、近代家族の中に囲い込まれていった子君の淋しく不安に満ちた表情を見落さずに捉えているために、子君という一人の「新女性」の不幸とその悲劇性が一層強く読者に伝わってくるのである。

以下は民国時期の女性作家たちの作品を対象に、これらがこの「新しい家庭」の中に飛び込んでいった女性たちをどのように捉え、描いてきたかを見ていくことにしたい。これまで「家庭瑣事」を描くのは女性作家の得意とすることであり、それゆえに文学としては「質」の劣るものと見られてきたが、今日あらためてこれらの作品を読み返してみると、近代家族にひそむジェンダーの問題が早くも問題として意識され始めていたことがわかる。まず廬隱の作品から見ていこう。

廬隱は一九二三年、旧式結婚による妻がいた郭夢良と困難を乗り越えて恋愛結婚をした。そして二五年にはこれまでの小説を集めた彼女の初めての作品集『海濱故人』を出版したが、この年の始めに女兒を出産、半年後の一〇月に夫を病気でなくしている。この間の様子を彼女は『廬隱自伝』⁽²⁷⁾でつぎのように記している。

私の処女作『海濱故人』が出版されてから、私の生活は変わり始めていた。その変化の中で私の心境は複雑になった。一方では満足し——さまざまな困難はあったが、私は郭君と結婚していた。また一方では失望を感じて

いた——理想の結婚生活と実際の結婚生活は、全く違っていたからだ。そんな心境のときに家庭のこまごましたことも重なり、半年ぐらいいは原稿が書けなかった。」(八三頁)

確かに彼女の創作は結婚以後、急激に減少している。そして、「前塵」(一九二四)⁽²⁸⁾や「勝利之後」(一九二五年)⁽²⁹⁾には、「私たちが家と戦い、何が何でも愛情のために、全てを犠牲にしようとしていた時は、どれほどの意気込みだったことか。今はともかく勝利をおさめたといえるけれど、勝利は得ても、やはりもとのまま苦しみが多く楽しみが少ない。その上やりたいと思うこともますます少なくなってしまった」(「勝利之後」)と主婦の憂鬱を語り、「何処は帰程」(一九二七年)⁽³⁰⁾でも結婚生活によって社会との繋がりをなくした女性の孤独感が描かれている。

交錯した人生の道程で、沙侶も一人の臆病な旅人である。彼女はすでに妻であり母であるが、依然として絶えず岐路をさまよい、「目的地はどこ?」と、そつとつぶやく。……これは一体どういうことだろう。結婚して、子供を産み母になり……一切が平凡に収まってしまい、計画も理想も全てが生きてきた足跡にすぎなくなってしまう。女の、これが女の天職なのだ。しかし、誰がひとえに女とはこんなに単純な動物だと信じられよう。家事をやり、子供を育て、夫に仕え、……これらのこまごましたことが、どんなに人をすり減らすことか。社会事業——個人の意志によって生まれる活動のことは残念ながら語らないほうがよい。……ああ、私はほんとうに軟弱だった、どうして結婚などしたのだろう?……私は時代の落伍者になってしまった。十余年来求めてきた知識を、今は全て波に託し、海底深く沈めてしまおう。

これらに吐露される言葉を拾い集めると、恋愛の結果ようやく手に入れた新しい結婚生活にヒロインたちが抱く幻滅の感情が、具体的には、夫の愛だけでは満たされない欠落感、結婚という人生の最高目標を達成したあとの虚脱感、

家事・育児による精神的肉体的疲労感、社会との繋がりをなくした孤独感となって現れていることがわかる。

廬隱の初期の小説には、以上のように「主婦の悲哀」を掬いあげるとどまり、それを論理的に説明することが出来ずに「家庭か仕事か」の二者択一の状況にヒロインたちを追いつめていくものが多いが、一九三〇年八月に再婚後、年末まで東京に滞在したときに書いた評論「今後婦女的出路³¹⁾」では大変水準の高い近代家族批判を展開している。

時代の齒車は間断なく回り、イブセンはとくに女性の進むべき道を我々に示している。……しかし事實は、

ノラはごく少数で、大多数の女性は、相変わらず人形の家の主人公になっている。その上、一部のだらしのない生活に慣れてしまった女性は、母の権利を守ることをタテに、陰で寄生的享樂生活を送っている。さらに一部の女性は、頭の中にまだ封建時代の余毒が残っていて、「男は外、女は内」の荒唐無稽な説を信じ、大変な苦勞をして個性のない従順な賢妻、家事をきりもりする良母になっている。同時に多くの男性中心主義の教育家は……女性の知力体力は男性にかなわないとか、良妻賢母は女性の唯一の天職だとか言って、これらの偏った言葉の帽子を女性の頭に押しつけ、彼女たちが家に帰らざるを得ないようにしている。その結果、一、独立した人格を失い、

二、社会的地位を失い、三、個性を埋没させてしまった。(二五八―二五九頁)

廬隱は以上の三点について男女平等の観点から具体的に反論を加える。独立した人格を失えば、愛されている時は宝物のように、嫌われればボロ靴のように捨てられ、男の思うままである。社会的地位を失うと、社会的な権利も義務もなくなり、男性に社会事業を独占されてしまう。そして第三点については、「人類には個性の差はあっても、男女間に優劣はなく」、男女の環境が完全に同じならば、異なる点は生理上のことが多いので「人工を加えることで、能力面での差をなくすることができる」(二五九―二六〇頁)と述べ、以下のような提案をしている。それはまさしく

近代家族からの解放のプランでもあった。

家庭制度がまだ存在する今日、我々は全ての女性に社会へ出て、家事を省みなくてもよいとは言えない。ではどうすればよいか。私は、家庭は男女が共同で作るものであり、家庭経済もまた当然男女で分担すべきだと考えているので、家事も、当然男女で負担すべきだと思う。女性は出産時期を除けば、その長ずるところにしたがって社会に奉仕し、それぞれ経済的独立をはかるべきである。男女の間には互助と共同生活があるのみで、依存的な生活はない。家事や子女の教育については、職業女性は両立が不可能であるようにみえるが、……家事の上手なしかるべき保母を探し、代わりに家事や子供の育児をしてもらえば、それは彼女たちにとっても一つの職業であり、彼女たちの人格の独立、経済の自立、個性の発展など種々の方面を侵害することにはならないはずだ。……今後の女性の進むべき道は、家庭の囲いを打破して社会に出ること、つまり人形の家を逃げ出し、人の生きるべき生活をし、女になるだけでなく、さらに人にならねばならない、これが私のただ一つのスローガンである。

(一六〇—一六一頁)

このように、廬隱は自らの体験を通して、家庭内の性別役割分業の解体と女性の経済的自立へ、『人形の家』のメッセージをさらに発展させて受容したのだった。

九、制度としての近代家族批判——沈櫻「旧雨」⁽³²⁾

沈櫻「旧雨」(一九三四年)は、久しぶりに再会した女学校時代の同級生がすでに家庭の主婦となり、かつての生

氣を失ってしまった姿に失望する話であり、あらずじは次のようである。上海の大学に通う主人公琳珊は卒業旅行で北京に行き、女学校時代の同窓の黄昭芳と再会した。そして二人は、恋愛の末に大学を中退して結婚していた旧友柳淑瑩の家庭を訪問することになる。柳淑瑩は教師をしている夫と女兒の三人家族で、使用人が一人いる。謝冰心「兩個家庭」の亜茜の家庭よりは生活レベルは落ちるが、条件だけみると柳淑瑩が亜茜のように幸せな主婦に描かれることも可能であった。しかし沈櫻はそうはしなかった。まず琳珊は柳淑瑩の憔悴した顔、鈍い笑顔に愕然とするが、柳淑瑩もまた動揺する心を必死で隠していたのだ。

この昔の同窓のおしゃべりは、あきらかに柳淑瑩に一種の覚醒の苦痛を与えていた。彼女は羨ましそうにこの二人の旧友を見、同時に自身を振り返って、無限の感傷に浸っていた。しかし、自尊心ゆえにこの感傷を表すことを望まず、彼女は相変わず微笑んでいた。とても淋しそうに笑っていた。(八一頁)

柳淑瑩の家を辞したあと、二人は沈んだ気持ちで語り合う。「本当に不平等だ。男は結婚しても、何の差し障りもないけれど、女は結婚すると、囚われてしまったように、何も話ができなくなり、心さえも痛めつけられて死んだようになってしまう」「結婚は恋愛の墓場だ、というけれど、私にはまったく女の墓場にみえる」という黄昭芳に、琳珊は「家は女の墓場だ、と言うべきだわ。もしこの〈家〉の組織がなければ、結婚して何が悪いの?」(八三頁)と反論する。彼女がここで言っている「〈家〉の組織」とは文脈から、伝統的家族制度ではなく、具体的には柳淑瑩の家庭に代表される近代家族を指し、意識の上では新旧を問わず家庭という形式そのものに対する本質的な批判だとわかる。そして琳珊は、結婚よりも仕事に生きる決意をしたかにみえる黄昭芳が卒業を目前にして就職問題が難航し焦っている姿をどこか冷めた目で見やりながら、黄昭芳が女性問題が生じる原因を女性自身の努力不足や意識の低さな

ど女性の側にのみに帰す態度に不満を覚え、「とにかく社会組織が変わらなければ、女の解放は語れないのよ」とつぶやいたあと、この言葉は上海で革命運動に入っている旧友がかつて自分に言った言葉であったのを思い出す。

これまでも、たとえば葉聖陶「倪煥之」(一九二八年)や茅盾「追求」(一九二九年)などには、恋愛結婚によって結ばれた相手の女性が、家庭に入った途端それまでの社会や仕事に対する理想を忘れてしまい、家庭内の細々としたことにしか関心を示さなくなる姿が描かれてきた。そしてこの妻の豹変ぶりが夫の目を通して批判的に捉えられ、その原因を妻の思想の未熟さや性格の卑屈さに求めるものが多かった。しかし沈櫻「旧雨」はこうした現実を認めながらも、ここで思考を停止するのではなく、それではなぜ女性がそのように変わってしまったのかを問ひかけ、さらに、もし女性が仕事か家庭のどちらか一方を選んでも、柳淑瑩や黄昭芳のように真の幸福が得られないのだとしたら、そもそも女性にのみこうした二者択一を迫る近代家族という枠組が批判されるべきではないのか、と問題の本質に迫っている。結婚が悪いのではなく家という形式が問題なのだ、と沈櫻は明確に問題の所在を捉えているのである。そしてその解決の道として「革命」による社会変革が遠景として提示されながら、主人公の行動を保留したまま物語を閉じているところに、近代家族からの解放の難しさを伝えている。

沈櫻には他に「女性」(一九二九年)⁽³³⁾のように、結婚後も作家として納得のいく作品を書きたいという白らの理想を実現するために、子供を中絶した妻の心の傷を描いたものや、「喜筵之後」(一九二九年)⁽³⁴⁾のように、「新しい家庭」にも作用している夫婦の見えない権力関係に触れたものなど近代家族の中で女性たちが直面する問題を題材にした作品を多数書いている。「喜筵之後」の冒頭は「生活は身体を縛る鎖のようであり、また心に噛みついた毒蛇のようである。茜華はこのごろいつもこんなふうに感じていた。生活が苦しいというのではなく、ひたすら寂しいだけだが、

その寂しい生活は茜華の心をたえず苛んでいた（五五頁）と、経済的には何不自由のない生活の中で主婦たちを襲う孤独感、名付けようのない不安から描きはじめる。いつのまにか友達との付き合いも疎遠になり、ただひたすら家で犬の帰りを待つだけの生活、恋愛結婚で結ばれた夫婦であったが、今は犬の浮気に悩まされてもいる。ある日、昔の友人から結婚を祝うパーティーの招待状が届くと、彼女はそこで親しかった旧友に会えるかもしれないと喜ぶ。ところが「行くのかい」という夫の問いに、

「いきたいわ」となぜだかわからないが「行き」の後ろに「……たい」をつけてしまい、言った後で、茜華はその声の調子まで惨めなほど弱々しくなっているのに気づいた。……「本当に行くのか。どういうつもりだ。夜、家に誰もいなかったらだめじゃないか」、そう言いながら、視線はひややかに彼女に向けられた。茜華は今の言葉と言う前から夫の答えを予想していたかのように、すでに暗い気持ちになってうなだれている。……茜華は心の中で不満げに思った「……まるであなたを不愉快にさせるのが間違いみたい。でもどうしてあなたの方は他人にどんな思いをさせても当然のようにしているの。結局は旧式の夫のやりかたしかできないのね」、憤りはたやすく悲しみに取って代わられる。突然自分の心を無くしてしまおうと思い、何も言いたくなくなった。（五七～五八頁）

ここには、夫中心の生活の息苦しさが満ちあふれている。たとえ恋愛結婚によって築いた近代家族にも家父長制が残っており、旧式の夫と同じように、妻の個性と感情を抑圧していることを、この部分はみごとに表現しているだろう。

十、家庭を拒否する女性たち——丁玲「一九三〇年春上海」⁽³⁵⁾

丁玲「一九三〇年春上海（一）」（一九三〇年）にも、盧隱や沈櫻が描く女性たちと同じ悩みを抱えるヒロイン美琳が登場する。美琳は高等教育をうけた活発な女性で、同居している作家の子彬との間に思想上のズレを意識し始めると、二人のこれまでの「新しい家庭」が急に偽りのものに思われてきた。

なぜだかわからないが彼女は急に不満を感じ始めた。……彼と同居をはじめるとすぐに、彼女は社会での一切の地位を失ったことに気付くべきだった。……彼女には彼以外に何もないことが分かった。以前は、……愛情さえあれば何でも捨てることができるといふ夢があった。彼女は彼を愛した後、本当に全てを捨てて彼の胸に飛び込んだのだった。そして深く考えもせずに幸福で楽しいと思ひ込んでこんなに長い間過ごしてきた。しかし今は違った。他のものが欲しい。社会に一つの地位を得、他の人と、たくさんの人と、関わり合いたかった。（二一〇—二一一頁）

はじめ子彬の文学的才能に惹かれ彼を崇拜さえしていた美琳は、「全てを」彼に託し「幸福で楽しいと思ひ込んで」暮らしてきた。だが子彬が政治や社会活動から遠ざかろうとするのに失望すると、この失望は自己凝視へとつながり、自身の隷属性に気づかされていったのである。彼女は、自己回復のために社会との繋がりをもちたいと強く望むようになり、同時に、愛しあっていると信じていた夫との関係についても疑いを抱き始める。

彼女はただ部屋に閉じこもって、一人の人間が仕事をおえた後の「娯楽」になることはできなかった。彼等は

お互いに愛し合っていたけれども。……彼女には彼が知らず知らずのうちに彼女を押さえつけているような気がした。彼女にちょっとした自由も許さず、それは旧式の家庭よりもひどかった。彼女の機嫌をとったり、笑わせたり、物質的にはいろいろ満足させてくれた。しかし思想的には彼女にただ彼の考え方だけを愛させ、さらに彼が愛するものを愛させようとした。彼女は考えつづけた。なぜなの？ 彼があんなに優しく、またあんなに専制的なのは。(二二頁)

彼女を束縛し抑圧するのは決して可視的な夫の権力ではなく、反対に優しい夫の「愛」であることが語られる。だが、その「愛」とは、彼女を家庭に閉じ込め自分好みの妻にしようとする閉鎖的で独占的な愛であり、彼女を人形のように自分の意のままに操る家父長的な愛であったのだ。この作品は、美琳が夫の望むような妻役割を降り、自らの意志で社会活動に出かけるところで終わる。そして彼女の置き手紙を見て怒り狂う夫の描写から、たとえ美琳がなおも夫との関係の修復にかすかな望みを抱いていたとしても、双方に歩み寄る気持ちがない以上、二人の別れは必至であることがわかる。沈櫻が保留したままの「新しい家庭」からの解放の道を、丁玲はこの作品において社会活動という具体的な道で指し示したことになる。同じように、陳衡哲は「洛綺思的問題」(一九二四年)⁽³⁶⁾で、アメリカの大学を舞台に、哲学の研究を優先させるために愛する男性との結婚を断念する知識女性の苦悩をとりあげ、凌叔華は「綺霞」(一九二七年)⁽³⁷⁾でヴァイオリンの勉強をするために婚家を飛び出して留學する女性を描くなど、「家庭」や「妻役割」を拒否した女性の話は多い。だが作者は皆一様に彼女たちの「その後」が果たして幸福であったのか、疑問を残したまま物語を閉じている。近代家族の中での女性の自己実現が、愛という甘美なベールに包まれているがゆえに困難をきわめたことを、これら民国時期の女性作家たちの作品は切々と訴えている。

十一、もう一つの流れ——近代家族批判

以上、本稿で紹介した日本と中国の「新しい家庭」を批判的に描いた作品を比較すると、日本の作品では一様にヒロインたちが結婚幻想を抱いていないことに気づく。むしろ結婚生活を始める前に様々な約束事をし警戒心をもって臨みながら、それでも、結局は家庭の中に取り込まれてしまう悲劇あるいはそれとの戦いが描かれている。ところが中国の作品では、恋愛結婚への幻想が強烈で「全てをすてて夫の胸に飛び込んでしまった」がゆえにその後には直面した現実の結婚生活に対する幻滅・失望感は相当強く、作品の重心はむしろその絶望を表現するほうにあるようだ。また、仕事か家庭か、という二者択一的思考が中国の女性作家に強いことも特色としてあげられる。そして日中両国の女性作家の作品に共通するのは、程度の差はあれ、すでに近代の洗礼をうけ精神的な自立を果たしたはずの女性たちが、白らが青春をかけて獲得した「近代」を結婚後に次々と奪い取られてしまう、この近代家族の矛盾を描いているところにあり、ほとんどが作者自身の辛い実体験を通して、近代家族という制度そのものにまで疑念が向けられるようになっていくことであろう。

これまで、中国では民国時期の文学について述べる時、五四時期の「恋愛神聖」をテーマにした作品や伝統的家批判の作品に注目しても、二〇年代半ばころから女性作家たちによって書き始められたこの「新しい家庭」批判についてはほとんど注目されることはなかったように思われる。しかしながら、これらの作品で提起された夫婦の関係性をめぐる言説や家庭内で女性たちが直面するジェンダーの問題などは、当時の日本の女性作家たちと問題意識を共有し

ながら、近代に生きる女性全体の問題として、また近代家族の問題として社会的な広がりをも有する大きなテーマであったといえる。この近代家族批判の文学も民国時期の文学史の中のもう一つの流れとして注目していいのではなからうか。

- 1 「文学の家庭と現実の家庭」《群像》一九六五年一〇月号
- 2 余華「活着」。初め中編として《收穫》一九九二年六期に掲載、九三年に長編として長江文芸出版社より単行本。
- 3 費孝通『生育制度』（商務印書館 一九四七年九月初版）。使用テキストは『郷土中国生育制度』（北京大学出版社 一九九八年五月）一六三、一七六頁
- 4 千田有紀「〈家〉のメタ社会学」《思想》一九九九年四月（岩波書店）八三頁
- 5 藤田英典「家族の現在」『家族』（東京大学出版会 一九九八年四月）一九頁
- 6 森繁男「近代家族の社会化機能」『家族論を学ぶ人のために』（世界思想社 一九九九年二月）三一―三三頁。本文第二章の記述に際しては、他に注8を参考にした。
- 7 フィリップ・アリーエス／杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生』（みすず書房 一九八〇年）
- 8 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』（勁草書房 一九八九年二月）一八―二〇頁。なお、第八項目の家族形態（核家族）について補足すると、欧米では前近代でも核家族が主流であったこと、また、東アジアでは核家族化が進行しつつあるものの、子が親と同居する慣習があるため今日でも三世代家族が一定の割合で存在していることなどから、核家族を近代家族の特徴とすることに消極的な意見もある。よって近世から近代への歴史的移行のなかで重要なのは、家族の形態よりも、家族の機能の変化、質的变化であると考えられるようになっている。

- 9 原ひろ子編『家族論』（放送大学教育振興会 二〇〇一年五月）五〇、一四〇～一七二頁
- 10 費孝通『郷土中国』（『Peasant Life in China』一九三九年、中国語版『郷土中国』上海観察社 一九四七年）。使用テキストは注3に同じ、四一～四二頁
- 11 J・ステイシー／秋山洋子訳『フェミニズムは中国をどう見るか』（勁草書房 一九九〇年）、白水紀子『中国女性の二〇世紀——近代家父長制研究』（明石書店 一〇〇一年四月）など。
- 12 潘允康・柳明主編『当代中国家庭大変動』（広東人民出版社 一九九四年五月）九、一〇四頁
- 13 白水紀子『現代中国女性群像』（『アジア遊学』四三号（勉誠出版 一〇〇二年九月）五頁
- 14 その後、一九三〇年代に日本軍の占領下の北京で、また四〇年代は国民党統治区で日本型良妻賢母思想が提唱されたことがあったが、思想闘争としてのレベルに止まり、実際の生活にそれほど大きな影響力はもたなかったといわれている。言葉としては、民国時期は良妻賢母、賢妻良母いずれも使われていたが、四九年以降は賢妻良母が一般的である。近代中国の良妻賢母思想については以下の文献に詳しい。
- ・瀨地山角『東アジアの家父長制』（勁草書房 一九九六年一月）
- ・姚毅『中国における良妻賢母言説と女性観の形成』（『論集 中国女性史』（中国女性史研究会編 吉川弘文館 一九九九年）
- ・呂美頤『抗日戦争時期華北淪陷区關於賢妻良母主義的論争』（『植民地期女性史第二回研究会・報告原稿』（東アジア近代女性史研究会 二〇〇一年三月一三～一四日）
- 15 謝冰心『兩個家庭』（『晨報』一九一九年九月一八～二二日。使用テキストは『冰心小説 相片』（上海古籍出版社 一九九七年一〇月）。邦訳に西野由希子訳『二つの家庭』（『中国現代文学珠玉選 三』（丸山昇監修 二玄社 二〇〇一年二月）がある。
- 16 謝冰心『第一次宴会』（『新月』一九三〇年第一卷六、七号合刊。使用テキストは注15に同じ。
- 17 謝冰心『談女人』。四一年、雑誌『星期評論』に連載、四三年、天地出版社より単行本。引用は竹内実訳『女のひとについて』

て』(朝日新聞社 一九九三年九月)を使用した。

- 18 使用テキストはイブセン／原千代海訳『人形の家』(岩波文庫 一九九六年五月)。中国におけるイブセン『人形の家』の受容と誤読については、これを中国における恋愛の受容という視点から論じた張競『近代中国と「恋愛」の発見』(岩波書店 一九九五年六月)がある。

- 19 伊藤野枝『惑い』(一九一四年)『伊藤野枝全集上』(学芸書林 一九七〇年三月)

- 20 伊藤野枝『乞食の名誉』(一九一八年)『伊藤野枝全集上』(注19)

- 21 伊藤野枝『或る妻から夫へ』(一九二一年)『伊藤野枝全集下』(注19)

- 22 田村俊子『彼女の生活』《中央公論》一九一五年七月。使用テキストは『彼女の生活』(ゆまに書房 二〇〇〇年十一月)

- 23 中条(宮本)百合子『伸子』《改造》一九二四年九月～二六年九月連載、一九二八年三月に改造社より単行本。使用テキストは宮本百合子『伸子』(新潮文庫 一九九二年)

- 24 佐多稲子『くれない』《婦人公論》一九三六年五月、一九三八年八月。一九三八年九月中央公論社より単行本。使用テキストは『日本の文学 四九 佐多稲子 壺井栄』(中央公論社 一九七四年三月)

- 25 駒尺喜美『伸子』にみる結婚『魔女的文学論』(三一書房 一九八二年七月)。引用は二〇〇一頁、二〇六頁。

- 26 鲁迅『傷逝』『彷徨』一九二五年一〇月。引用は丸尾常喜訳『傷逝』『鲁迅全集 二』(学習研究社 一九八四年十一月)三二、三三頁。

- 27 盧隱『盧隱自伝』(第一出版社 一九三四年一〇月)

- 28 盧隱『前塵』《小説月報》一五卷六期(一九二四年六月)

- 29 盧隱『勝利之後』《小説月報》一六卷六期(一九二五年六月)。引用は『盧隱選集』(百花文芸出版社 一九八三年一〇月)二、六四頁

30 盧隱「何処是婦程」《小説月報》一八卷二期（一九二七年二月）。引用は注29、三〇八、三〇九頁

31 盧隱「今後婦女的出路」《東京小品》（北新書局一九三六年一月）。使用テキストは『東京小品』（河北教育出版社一九九五年一〇月）

32 沈櫻「旧雨」《文学季刊》一卷一期（一九三四年一月）。使用テキストは『愛情的開始』（上海古籍出版社一九九七年一〇月）。同じテーマをあつかったものに凌叔華「小劉」（《新月》一九三九年二月）がある。

33 沈櫻「女性」《小説月報》二〇卷九期（一九二九年九月、原題「妻」署名小鈴）

34 沈櫻「喜筵之後」《喜筵之後》（上海北新書局一九二九年六月）、使用テキストは注32に同じ。引用は佐藤普美子訳「祝宴の後」『中国現代文学珠玉選 三』（注15）を使用した。

35 丁玲「一九三〇年春上海（一）」《小説月報》二二卷九期（一九三〇年九月）。使用テキストは『丁玲文集（上）』（匯文閣書店一九七二年二月）

36 陳衡哲「洛綺思的問題」《小説月報》一五卷一〇期（一九二四年一〇月）

37 凌叔華「綺霞」《現代評論》第六卷第一三八期（一九二七年七月二〇日）

（補注一） 伊藤野枝（一八九五～一九二三）福岡生まれ。上野女学校卒。一九一一年、旧式結婚から逃れ、女学校時代の英語教師であった辻潤と結婚。このころ青鞥社の仕事を手伝うようになり、一五年には平塚らいてうからその編集を全面的に引き継ぐ。一九一六年、辻と別れアナキスト大杉栄と同居をはじめ。二三年、関東大震災の混乱に紛れて大杉とともに絞殺される。

（補注二） 田村俊子（一八八四～一九四五）東京生まれ。日本女子大学中退。青鞥社賛助員。代表作は「生血」「木乃伊の口紅」など「新しい女」が直面した性の二重規範、男女相剋のテーマを扱ったものが多く、「彼女の生活」は近代日本文学

中国文学にみる「近代家族」批判

における女性解放文学の最高峰と言われている。晩年は一九三八年に上海に渡り、四二年より中国の女性作家関露の協力を得て中国語雑誌《女声》を創刊した。一九四五年四月上海にて病死。

(補注三)

宮本百合子（一八九九—一九五一）東京生まれ。日本女子大中退。一九一六年処女作「貧しき人々の群」を発表、これより作家生活にはいる。一九一八年父とともに渡米、翌年コロンビア大学の聴講生となり、最初の夫となる荒木茂と結婚し、帰国。小説「伸子」はこの荒木との恋愛から離婚するまでの体験をもとに書かれたもの。一七年、ソヴィエトへ出発、帰国後は日本プロレタリア作家同盟に加入、作家として大きな転換期をむかえる。二一年日本共産党に入党、翌三二年宮本顕治と結婚。代表作は「伸子」の他、「播州平野」「風知草」がある。

(補注四)

佐多稲子（一九〇四—一九九八）長崎生まれ。一九一五年一家で上京後、小学校を中退してキャラメル工場で働く。のち、料亭の座敷女中、書店の店員となり、二一年に詩を投稿して「詩と人生」の準同人となる。結婚後一年で離婚、カフエーの女給をしていたときに「驢馬」同人の窪川鶴次郎と出会い結婚。二八年処女作「キャラメル工場から」を発表、翌年日本プロレタリア作家同盟に加入。代表作には夫の愛人問題や家庭生活と仕事との相剋を実体験に基づいて描いた「くれない」「灰色の午後」などがある。

参考文献

- 井出文子『自由それは私自身——評伝・伊藤野枝』（筑摩書房 一九七九年一〇月）
今井泰子他編『短編 女性文学 近代（増補版）』（おうふう 一九九九年二月）
岩淵宏子『宮本百合子——家族、政治、そしてフェミニズム』（翰林書房 一九九六年一〇月）
岡田英弘・小堀桂一郎編『家族——文学の中の親子関係』（PHP研究所 一九八一年七月）
落合恵美子『近代家族とフェミニズム』（勁草書房 一九八九年十二月）

駒尺喜美『魔女的文学論』(二二書房 一九八二年七月)

小山静子『良妻賢母という規範』(勁草書房 一九九一年一〇月)

中山和子他編『ジェンダーの日本近代文学』(翰林書房 一九九九年四月)

牟田和忠『戦略としての家族』(新曜社 一九九六年七月)

立命館大学人文科学研究所編『文学にみる親子の葛藤と信頼』(一九九九年二月)

【付記】本稿は韓国ソウルにて開催された第二二回中国学国際学術大会(二〇〇二年八月三〜二四日、韓国外国語大学校)での報告原稿「従日中女性文学看〈近代家族〉批判」(中国語)をもとに加筆・修正をしたものである。